

研究報告

高齢者看護学実習における4日間の学習の特徴 —回復期リハビリテーション病棟実習記録より—

西尾 ゆかり¹, 岩佐 文代², 岸 友里², 森 みどり², 横井 沙智子²,
岡田 みのり², 田中 冴子², 橋村 宏美², 太田 節子¹

¹滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座, ²滋賀医科大学医学部附属病院看護部

要旨

本研究の目的は、高齢者看護学実習において看護学生が高齢者看護ケアを学ぶ過程の特徴を明らかにすることである。研究協力を承諾した看護学生の実習記録を対象とし、分析は学生の実習記録を精読し、一文一意味の文章に要約しコードとした。さらにコードを研究目的にそって分類・整理し、それらをカテゴリー化した。その結果、実習1日目は【臨地実習に対する緊張を知覚する】【患者の状態を予測する】【手さぐりでケアを実践する】【受け持ち患者へのケアの方針を立てる】等の7カテゴリー、実習2日目は【受け持ち患者と他学生の患者を観察する】【知識と情報を統合し患者理解が深まる】【患者に合わせたケア方法を模索し判断する】【モデルを手がかりにケアを実践する】等の7カテゴリー、実習3日目は【患者の立場に同化し患者理解がより深まる】【患者に合わせたケアを実践する】【看護の役割を実感し喜ぶ】【適切なケア方法の判断に困惑し疑問を持つ】等の8カテゴリー、実習4日目は【看護過程を理解し、ケア実践の評価と修正を行う】等の6カテゴリーが抽出された。実習初期である3日目までに、学生の患者への関心を高めて学習活動への適応へと導く教授活動が重要であると考えられる。

キーワード：高齢者看護学実習、学生、実習記録、高齢者看護ケア

はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、学生にとって教室内で学んだ知識・理論・技術を駆使するという体験に、看護の意味を問い、実践能力を身につける授業の一形態である。安酸¹⁾は、看護学実習を学生の経験から始まる授業であるとし、臨床の中にどっぷりつかるという直接的経験を推奨している。そして、学生の主体的な学習意欲を喚起する教育方法として、学生の経験そのものを重要視している。

高齢者は、他の年齢層に比べ、個人差が非常に大きい。そのため、高齢者看護は複雑であり、部分的で一面的な見方では偏りがあり、広い視野で個人や集団、地域社会にアプローチしていくことが大切である²⁾。本学高齢者看護学実習では、1週間の病棟実習において複数受け持ち方式を導入している。その効果として、学生は援助技術体験が増え、異なるタイプの患者と関わることで視野が広がり、受け持ち患者の個性をより理解することができること等が明らかとなった³⁾。

高齢者看護学実習における学生を対象とした研究^{4) 6)}では、学生の学びを明らかにしているが、高齢者看護を学ぶ過程については、明らかにされていない。学生が、臨地実習において何を体験し、どのように高齢者への看護ケアを学んでいるのかを日々振り返り、記述することで、学生の高齢者看護ケアを学ぶ日々の特徴が見出されるのではないかと考えた。そこで、本研究の目的は、高齢者看護学実習において学生が高齢者看護ケアを学ぶ特徴を実習日毎に明らかにし、より効果的な臨地実習指

導の方法を検討することとする。

実習の概要

1. 高齢者看護学実習の病棟実習は、1週間（1単位）としている。
2. 回復期リハビリテーション病棟にて行い、患者1名を受け持つ。また、1グループ6名の学生をペアとし、受け持ち患者のケアを主としながらペア学生の患者の看護計画・ケアへも参加する⁶⁾。ペア学生は、健康障害のレベルが異なる患者を指導者が割り当て、学生の援助技術の経験の偏りを少なくした。

研究方法

研究デザイン：質的記述的研究

研究対象：高齢者看護学実習を修了した第3学年の学生32名のうち、研究者がランダムに抽出し、研究の趣旨を説明し、研究協力を承諾を得られた学生6名の実習記録。

データ収集：その日受けた指導やケア実施内容を整理し、翌日の実習に活かすことを目的に、実習1日目から4日目の実習終了後、学生に学びと振り返りを記述してもらう。

分析方法：実習記録を精読し、一文一意味の文章に要約し、コード化する。これらのコードを研究目的の視点に沿って分類・整理してカテゴリー化し、カテゴリー間の関連性を構造化する。

用語の操作的定義：

高齢者看護ケア；学生が入院中の高齢者患者に関心を向け、患者の安全やニーズの充足のために間接的・直接的な働きかけをすること。

倫理的配慮：学生に口頭にて研究目的、方法、研究協力は任意であり、成績には無関係であることを説明し、データは学生を特定できないようにした。また、データは研究以外に使用せず、研究終了後は裁断処理することを説明して承諾を得た。

結果および考察

1. 対象者の概要

学生6名は、全員女性であった。受け持ち患者は、整形疾患患者3名、脳神経疾患患者3名であった。

2. 実習日による学びの特徴

学生6名の実習記録より、看護ケアの学びの特徴として抽出されたコードを分析した結果、実習初日から4日目までに6～8つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〈〉、コードを「」で示す。以下、実習日による学びの特徴を示す。

1) 実習1日目の学びの特徴 (表1)

学生は、「多職種の連携」や「患者の日常行動すべてがリハビリである」という〈回復期リハビリ病棟の特性を理解〉していた。また、「環境整備は転倒予防のためでもある」ことに気づき、〈環境整備の意味を考える〉などの【リハビリ看護について学びを深め】ていた。一方、患者を直接介助せず、患者のできることを見出し「見守る」という判断が難しいという【リハビリ看護の難しさ】も感じていた。そして、ベッドサイドで受け持ち患者を観察する等【カルテや患者・看護師等を観察することにより情報収集】し、カーテンを支えにする「患者の移動場面」や「リハビリを継続している」ことから〈転倒リスクや回復につながるのではないかと【患者の状態を予測】していた。また、〈患者やスタッフの状況から自分のすべきケアを判断〉し、〈患者が高齢者であることを意識〉しながら誤嚥予防や転倒予防のケアを

【手さぐりで実践】していた。そして、麻痺による口腔内残渣がある等の情報から「口腔ケアや転倒予防」、「退院後の不安があるので傾聴する」等の【受け持ち患者へのケアの方針】を立てていた。学生は、既習の知識をもとに、高齢や疾病による障害を観察し、転倒・誤嚥のリスクが高いことをアセスメントし、受け持ち患者への個別看護の目標を初日から見出すことができたと考える。また、身体面だけでなく、退院後の生活への不安といった心理・社会面についてもアセスメントし、傾聴するというケア計画を立てることができていた。

2) 実習2日目の学びの特徴 (表2)

学生は、【受け持ち患者と他学生の患者を観察】していた。これは、本実習で実施している複数患者受け持ち

方式によりタイプの異なる患者を学ぼうとする機会³⁾を活用していたと考える。また、学生は前日の患者と比較して〈患者の変化〉に気づき、既習の“できるADL”と“しているADL”といった〈知識の理解が深まる〉ことで【知識と情報を統合し患者理解】を深めていた。さらに、リハビリ見学によって移動の援助方法を考える等の【患者に合わせたケア方法を模索し判断】していた。学生は、実習1日目の患者と比較して患者の変化に気づき、受け持ち患者を通して既習の知識を実習の場で確認し、統合することで理解を深め、患者個人へのケア方法を判断していたと思われる。このことから、学生が学内で学んだ高齢者の一般的な特徴から患者個人の特徴として理解できるように支援していくことが必要であると考える。

学生は、実習1日目において、スタッフを観察するままだに【手さぐりでケアを実践】していたが、実習2日目では、〈臨床指導者のケア方法〉を観察し、その【モデルを手がかりにケアを実践】していた。学生は臨床指導者や教員をモデルとして見出し、技術や態度を模倣することによって、その特徴を自分の中に取り入れようとしている学習活動⁷⁾が本研究でも明らかとなった。

3) 実習3日目の学びの特徴 (表3)

学生は、「患者の立場で考える」ことや「患者の大切にしているものを知る」ことによって、【患者の立場に同化し患者理解がより深まる】ことができていた。これは、学生が受け持ち患者の問題現象に専心し、苦痛や生活へ共感することで、より高齢者の社会的な側面を理解することができていたと考える。また、学生は【患者の意思を尊重しながら適切なケア方法を判断】し、【患者に合わせたケアを実践】、【ケア実践の評価と修正】を行っていた。そして、【看護の役割を実感し喜び】を感じていた。井上ら⁸⁾が述べているように、実習初期は特に患者への関心等を高める学習活動を導くことや、生活者として学生の感情や意識を喚起させ、それを承認する教授活動が重要であると考える。

【患者への適切なケア方法の判断に困惑し疑問】を持った学生がいた。ある学生は、計画した自立へのケア（病棟でのリハビリ）を患者の午睡によって、思うように進められないことに困惑していた。高齢者の日中の仮眠は休息として必要であるという既習の知識と、一方で筋力低下等の防止のための活動が必要であるという知識を用いて、どのように対応すればよいのか疑問を抱いていた。この経験は、教室では得られない実習ならではの学びの機会である。この学生の疑問を起点に、問題解決への方向付けをする教授活動が、より学生が成長できる機会にもなるのではないかと考える。

4) 実習4日目の学びの特徴 (表4)

学生は、3日目と同様に【患者を観察】し、【患者の立場に同化し患者理解】をより深め、【患者の意思を尊重

しながら患者に合わせたケアを【実践】していた。そして、受け持ち患者を通して、既習の【看護過程を理解し、ケア実践の評価と修正】をしていた。実習の場で日々重ねた学びを踏まえ、高齢者への看護ケア方法を計画し、実践を繰り返すことで、学生は短期間で既習の【看護過程を理解】することができていたのではないかと考える。また、リハビリ病棟の入院患者は、外科や内科病棟の患者に比べ、疾患の症状に緊急を要することや複雑な治療や検査等が稀であるため、学生にとって緊張が緩和されやすく、短期間の実習でも、看護展開が理解しやすいのではないと思われる。

実習4日目の学びは、実習3日目とあまり変化がみられなかった。そのため、看護過程の展開においても、実習3日目までの初期から、患者への関心を高めて学習活動への適応へ導く教授活動が重要であると考えられる。また、カンファレンスからも学習活動が促進していたと考えられる。カンファレンスの展開の効果も、教員の力量に影響される⁹⁾ため、学生の学びの特徴を日々把握し、学習の方向付けを行うことが重要になると示唆される。

結論

学生の記述した実習記録より、高齢者看護ケアを学ぶ過程の特徴について以下のことが明らかとなった。

1. 実習1日目は【臨地実習に対する緊張を覚悟する】【患者の状態を予測する】【受け持ち患者へのケアの方針を立てる】等の7カテゴリー、実習2日目は【受け持ち患者と他学生の患者を観察する】【知識と情報を統合し患者理解が深まる】【患者に合わせたケア方法を模索し判断する】【モデルを手がかりにケアを実践する】等の7カテゴリーが抽出された。実習3日目は【患者の立場に同化し患者理解がより深まる】【看護の役割を実感し喜ぶ】【適切なケア方法の判断に困惑し疑問を持つ】等の8カテゴリー、実習4日目は【看護過程を理解し、ケア実践の評価と修正を行う】等の6カテゴリーが抽出された。
2. 実習初期である3日目までに、学生の患者への関心を高めて学習活動への適応へと導く教授活動が重要であることが示唆された。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力してくださいました学生の方々に厚くお礼申し上げます。

文献

- 1) 安酸史子：経験型実習教育の考え方. Qual Nurs, 5, 568-576, 1999.
- 2) 奥野茂代, 大西和子：老年看護学 I 老年看護学概論. 6, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2006.
- 3) 西尾ゆかり, 太田節子, 菅浦真以, 萩原淳子：高齢者看護学実習における学生の複数患者受け持ち方式の検討. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 7 (1), 34-37, 2008.
- 4) 鈴木純恵, 丹下幸子, 細矢智子, 土屋陽子, 市村久美子, 金子昌子, 堀内ふき, 黒木淳子：成人・老人看護学実習における学生の学び—リハビリテーション看護領域の実習感想文より—. 茨城県立医療大学紀要, 9, 119-131, 2004.
- 5) 永山弘子, 市村久美子, 黒木淳子, 宮林幸江, 丹下幸子, 角智美, 堀内ふき：リハビリテーション看護学実習における学生の学び—学生の実習記録から—. 茨城県立医療大学紀要, 10, 85-95, 2005.
- 6) 永山弘子, 市村久美子, 秋野恵理：新カリキュラムにおけるリハビリテーション看護実習の学生の学び—学生の実習記録から—. 茨城県立医療大学紀要, 11, 99-108, 2006.
- 7) 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ：看護学実習における学生行動の概念化. 看護学教育学研究, 12 (1), 15-28, 2003.
- 8) 井上映子, 峯薫, 齋藤やよい：リハビリテーション看護実習における学生の意味化した経験の構造. The Kitakanto Medical Journal 15 (3), 225-234, 2005.
- 9) 正木治恵, 野口美和子, 湯浅美千代, 佐藤弘美, 黒田久美子：臨床実習カンファレンスの展開分析. 千葉大学看護学部紀要, 19, 27-34, 1997.

表1. 実習1日目の学びの特徴

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実 習 1 日 目 の 特 徴	リハビリ看護について学びを深める	回復期リハビリ病棟の特性を理解する	多職種が連携している/日常生活行動すべてがリハビリである
		環境整備の意味を考える	環境整備は転倒予防のためでもあることに気づく
	リハビリ看護の難しさを感じる	「見守る」という判断が難しいと感じる	患者のできることを見出し見守るか介助するか判断が難しいと思う
	臨地実習に対する緊張を知覚する	実習に対する緊張を感じる	異なる実習で患者を受け持つことに緊張する
		患者との対面後、緊張が緩和する	患者が笑顔で受け入れてくれ、ホッとする
	カルテや患者・看護師等を観察することにより情報収集する	カルテから情報収集する	カルテから情報収集する
		受け持ち患者を観察する	ベッドサイドやリハビリ見学で受け持ち患者を観察する
		看護師や病棟スタッフを観察する	食事介助やリハビリ時の看護師やスタッフを観察する
	患者の状態を予測する	患者の転倒リスクや回復を予測する	患者の移動場面を観察し転倒するのではないかとと思う/リハビリを継続することで、回復につながると思う
	受け持ち患者へのケアの方針(枠組み)を立てる	観察により患者理解を深めることを願う	リハビリ見学や病棟での行動を観察しケアに活かしたい
		患者に合わせたケア実践ができることを願う	患者に合わせた転倒予防や口腔ケア等のケア実践ができるようになりたい
		ケアの方針を考える	転倒予防のためベッド周囲の環境に注意する/散歩など活動を取り入れることをひらめく/退院後の不安があるので傾聴する
	手さぐりでケアを実践する	患者やスタッフの状況から自分のすべきケアを判断し、手探りで実施する	食事介助やリハビリの見学中に、スタッフの状況を見ながら、自分ができる援助はなにか考え、実施する
		患者が高齢者であることを意識する	高齢患者であるため、誤嚥をしないように注意する

表2. 実習2日目の学びの特徴

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実 習 2 日 目 の 特 徴	患者の反応に対する戸惑いや安心を感じる	患者の反応に戸惑う	患者の体調が悪く、戸惑う
		患者の反応に安心する	患者の体調が良く、安心する
受け持ち患者と他学生の患者を観察する	受け持ち患者を観察する	ベッドサイドやリハビリ見学等で受け持ち患者を観察する	
	他学生の患者を観察する	ベア学生の患者を観察する	
知識と情報を統合し、患者理解が深まる	患者の変化に気づく	観察により、昨日と比較して患者の変化に気づく	
	知識の理解が深まる	“できるADL”と“しているADL”をより理解する	
	情報と知識を統合して患者を理解する	観察して得た情報と既習の知識を統合して患者を理解する	
患者に合わせたケア方法を模索し判断する	患者に合わせたケア方法を模索する	リハビリ中の患者の様子から、移動方法を考える	
	患者に合わせたケア方法を判断する	患者の生活行動やリハビリを観察し、介助方法を判断する	
モデルを手がかりにケアを実施する	臨床指導者のケア方法をモデルにケアを実施する	臨床指導者のケア方法をもとにケアを実践する	
自分のケア技術に対する無力感や技術不足を感じる	ケア技術不足や無力感を感じる	うまく実践できず、自分の技術不足を感じる/無力さを感じる	
	ケア方法の判断に難しさを感じる	場合に応じたケア方法を判断することが難しいと感じる	
振り返りやカンファレンスにより具体的なケア方法を判断する	ケア実践を振り返り、評価する	患者の反応からケア実践を振り返り評価する	
	具体的なケア方法を考える	患者の動線を考えて環境整備する方法を考える/リハビリ意欲を維持できるように声かけの方法を考える	
	カンファレンスにより視野が広がる	カンファレンスから、視野を広げたケア方法を考える	

表3. 実習3日目の学びの特徴

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実 習 3 日 目 の 特 徴	患者の反応に一喜一憂する	患者の反応に安心・喜び・驚きを感じる	患者の反応に安心し、よろこぶ／患者の反応に驚く
	患者を観察する	受け持ち患者を観察する	ベッドサイドやリハビリ等で受け持ち患者を観察する
		他の患者を観察する	受け持ち患者と同室の患者を観察する
	患者の立場に同化し、患者理解がより深まる	患者の立場に同化する	患者の立場になって考える
		患者の変化に気づく	患者が変化していることに気づく
		患者を理解する	患者の状態を理解する（アセスメントする）
		患者の状態を予測する	患者の移動場面から、転倒のリスクを予測する
	患者の意思を尊重しながら適切なケア方法を判断する	患者の意思を尊重しながら、患者に合わせたケア方法を考える	患者の意思を考慮しながら、看護としてどのようなケア方法が適切か考える
	患者に合わせたケアを実践する	自ら判断したケア方法を実践する	自分が判断したケア方法を実践する
		他者からの助言をもとにケアを実践する	臨床指導者・他学生・教員からの助言をもとにケアを実践する
	ケア実践の評価・修正を行う	ケア実践を振り返り評価する	患者の反応を踏まえ、ケアを振り返り評価する
		学びを活かしたケア実践ができることを願う	既習知識と実習の学びを活かしたケア実践ができることを願う
適切なケア方法の判断に困惑し疑問を持つ	患者の反応から適切なケア方法の判断に難しさを感じ、疑問を持つ	休息と活動について、どのような対応をすればよいのか判断することが難しいと感じる	
看護の役割を実感し喜びを感じる	看護師の役割を実感する	看護師の役割を実感する	
	知識を活用したケア実践ができ、喜ぶ	既習の知識を活用できる機会となったことをよろこぶ	

表4. 実習4日目の学びの特徴

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
実 習 4 日 目 の 特 徴	患者を観察する	受け持ち患者を観察する	ベッドサイドやリハビリで受け持ち患者を観察する
	患者の立場に同化し、患者理解がより深まる	患者の立場に同化する	患者の立場で考える
		患者を理解する	ベッド周囲の物を観察することで患者の大切にしているものを知る／自宅についての情報を得ることで患者の思いを理解する
		情報と知識を統合して患者を理解する	観察で得た情報と既習の知識を統合して患者を理解する
	患者の意思を尊重しながらケアを実践する	患者の意思を尊重しながらケア実践する	患者の意思を考慮しながら、安全も踏まえたケアを実践する
		他者からの助言をもとにケアを実践する	臨床指導者や教員の助言をもとにケア方法を判断し、実践する
	ケア技術に対する力不足を感じる	自分のケア技術力不足を感じる	自分のケアに柔軟性がないと感じる
	看護過程を理解し、ケア実践の評価・修正をする	ケア実践を振り返り、評価する	患者の反応からケアを振り返り、評価する
		看護過程を理解する	実習により情報収集からアセスメントし、ケアの計画と実践につながることを実感する
ケア方法の判断に悩む	ケア方法の判断に悩む	覚醒を促すかどうかなどのケア方法の判断に悩む	